

第 50 回 全日本聾教育研究大会（附属大会）大会主題

「聴覚障害教育の専門性のさらなる追究と共有」

《主題設定の理由》

全日本聾教育研究大会は、明治 40 年に開催された「第 1 回日本盲啞学校教員会」をその起源とし、その後、組織や名称を変えながら今日まで引き継がれてきた聴覚障害教育に関わる全国規模の研究大会である。昭和 41 年 10 月に高知で全日本聾教育研究会の結成大会が開催されてから今日のような組織や運営形態が整い、翌昭和 42 年には授業研究会と研究分科会を柱とした第 1 回の全国大会が名古屋で開催された。関東地区で 11 回目の開催となる今回の附属大会は第 50 回の節目の大会でもある。

平成 18 年 10 月に第 40 回大会を「APCD：アジア太平洋地域聴覚障害者問題会議」と共催する形をとって関東地区で開催した。この大会はそれまでの日本の聴覚障害教育の総括を行い「専門性」の継承を確認するうえで意義深いものとなったが、その後、聴覚障害教育を取り巻く環境は大きく変化した。平成 19 年、学校教育法の改正により特別支援教育体制への移行が図られたが、今日の「特別支援学校（聴覚障害）・聾学校」（以下、聾学校）には、幼児児童生徒の多様な教育的ニーズに応える姿勢とその実態に応じた確かな教育実践、そして、センター的機能を充実させながら地域の学校を支援していくことが求められるようになった。また、新生児聴覚スクリーニング検査の普及、補聴器の性能の向上、人工内耳装用児の増加等、医学・工学の進歩がきこえに対する意識をさらに高めたが、一方では手話が聴覚障害者にとっての言語であることの認識も定着し、全国の聾学校がそれぞれの教育理念のもとで「確かな学力」と「生きる力」の育成に向けて研鑽を重ねた。ICT の活用、グローバルな人材の育成、社会自立と QOL の向上、キャリア教育等も新たな課題となっている。

この間の聴覚障害教育が辿った道のりは決して平坦なものではなかった。しかし、そうした変化の中でも、聴覚障害教育の現場は時代に合った教育方法を取り入れながら広く教育界に貢献していくための新しい視点を養い、なおかつ、その土台となる「専門性」を変わらない本質として大切に考えてきた。「コミュニケーションの基盤である言語に関する能力の育成」や、新学習指導要領における「言語活動の充実」は、聾学校が継承し続けてきた「専門性」の中核をなす部分にあたる。聴覚障害教育はことばを基軸とする教育方法や知見を教育的資産として多く有しているが、今後もそのさらなる「追究」を推し進めていかななくてはならない。今日、聴覚障害教育が有する「専門性」は聾学校以外の教育現場にも広く浸透させていくことが期待され、実践から得た指導法や教材等の知見を発信していく機会も増えている。それらの「専門性」は常に日々の教育実践の中で磨き続けられ実効性が保たれたものでなくてはならず、その源は依然として聴覚障害教育の現場に求め続けられるものと考えている。教育の多様化が進む中であっても聾学校は一貫した教育の可能性と成果を絶えず発信し続け、その存在を益々確固たるものとしていく必要がある。

本大会では、聴覚障害教育が築き上げてきた「専門性」について授業研究等を通して再度の確認を行い、そのうえで、社会や時代の変化に伴って見えてきた新たな役割や課題についても共に考え、学びを深めたい。そして、各聾学校の特色を互いに理解した上で「共有」し、今後の教育実践につなげていきたい。本大会の主題「聴覚障害教育の専門性のさらなる追究と共有」には、こうした願いがこめられている。